



Title	17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本：ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ
Author(s)	長峰, 博之
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 24-25
Issue Date	2021-07-31
DOI	10.14943/jacas.17.24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89145
Type	article
File Information	JB017_003nagamine.pdf



[Instructions for use](#)

17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料 『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本 — ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ —

長峰 博之

無名氏『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』(以下、『ダフタリ』と略す)は17世紀80年代にヴォルガ・ウラル地方で成立したとされるテュルク語史料である。チンギス(第1章)、ティムール(第2章)、ヴォルガ・ウラル地方の歴史(第6章)など全6章のダスタンで構成されている。全体的に伝承的要素が強く、「史実を探る」という意味では扱いの難しい史料であるが、一方でチンギス家の政権消滅後のヴォルガ・ウラル地方における歴史認識の変容や知の伝播のあり方を検討するうえで非常に興味深い情報を含んでいる。M. A. Usmanov に代表される本史料に関する先行研究は旧ソ連圏の写本を中心に進められてきたが、本報告ではそれ以外の4写本(ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ)に含まれる独自の情報を抽出・分析し、そこからあらためて本史料の史料的可能性について検討した。

ロンドン写本は、『ダフタリ』の第1章、アブル・ガーズィー『テュルク系譜』のチンギスに関する部分とその後の系譜、カーディル・アリー・ベクの史書(17世紀初頭のカシモフ・ハン国史料。ラシードウッディーン『集史』のテュルク語訳を含む)のやはりチンギスに関する部分で構成されている。じつはその他の諸写本においても、これらの諸史料が1つにまとめられているものが確認される。このことは、ヴォルガ・ウラル地方(やその周辺)においてこれらがチンギス家の歴史などを参照する際の典拠として利用されていた、あるいは、ヨーロッパ東洋学の興隆のなかで比較的早期に「再発見」されて普及したことを示唆しているだろう。

パリ写本を含むいくつかの写本には、第2章のティムールのコンスタンティノーブル征服の物語のところにコンスタンティノーブル図を挿入しているものがある。そこでは同都市はアレクサンドロスに関連づけられ、さらにこの図の出典がラブグズィー『預言者物語』のアレクサンドロス伝承にあることがM. Ivanicsによって指摘されている。ヴォルガ・ウラル地方がロシアに併合されて以降、同地におけるチンギス家のカリスマが低下し、ティムールのイスラーム的英雄化が進む現象が見られるが、そこで形成されたティムールの物語はアレクサンドロス伝承の影響を受けた可能性が考えられる。また、ティムールの物語のなかには、

ロシア年代記に類似のものが見出せることも指摘されている。『ダフタリ』の情報源についてはさまざまな議論があるが、これまでの議論以上にじつに多様な情報源(伝承)のうえに本史料が成立したことが窺われる。

ベルリン写本は他の写本群には見られない補足部分を含む非常に特徴的な写本であり、同系統のものとして I. A. Mustakimov によって紹介されたカザン写本が確認される。補足内容からは、ウテミシュ・ハーギー『チンギス・ナーマ』(16世紀のヒヴァ・ハン国史料)や『ムイーン史選』(15世紀のティムール朝史料)のバリ写本王朝表と共通する情報が抽出される。その他にも、中央アジアやクリミアに関する興味深い情報が含まれている。これらは、Mustakimov もいうように、ヴォルガ・ウラル地方と中央アジア、クリミアとの間の知の伝播のあり方を考えるうえで非常に示唆に富むものである。

エディンバラ写本は、A. J. Frank が紹介したように、全6章を含む良好な写本である。『ダフタリ』は17世紀80年代に成立したとされるが、じつは最後の第6章にその後の出来事を書き継いだ写本群がある。本写本の第6章には18世紀20年代までの出来事が記されており、すなわち、本写本もそうした写本群に属することが明らかになる。また、本写本はアストラハンのムスリム知識人により筆写され、1819-25年に同地で活動したスコットランド宣教師のジョン・ディクソンによって収集された。まさにこの時期に、のちにカザン大学東洋学の中心となるカゼム=ベクが同地に滞在し、スコットランド宣教師と懇意にしていたことは注目に値する。明確な史料はまだ見出せていないが、カゼム=ベクがジョン・ディクソンの写本収集に何らかの形で関与した可能性も考え得る。いずれにせよ、本写本はムスリム社会における知の伝播とヨーロッパ東洋学の関わりを垣間見せてくれるものである。

本報告で検討した4写本には、他の写本には見られない興味深い情報が多く含まれている。それらから見えてくるのは、『ダフタリ』がじつに多様な情報源のうえの成立し、またじつに多様な受容のされ方をしていったということである。またこれらは、ヴォルガ・ウラル地方においてチンギス家のカリスマが低下してティムールの英雄化が進む一方で、それでもチンギス家の歴史が語られつづけたこと、そしてヨーロッパ東洋学との接触などのなかでチンギス家の歴史が「再発見」されていったことをも示唆する。本史料およびその写本研究は、ヴォルガ・ウラル地方(やその周辺)における歴史認識の変容、知の伝播のあり方を解明する手がかりになるとと思われる。

(小山工業高等専門学校)